



「万が一捕まったとしても我々の事は口にするな」
「了解」

「一人みただぞ、身の程知らずだぜ」
「さて、色々とお話しないな・・・」

囚われた女スパイの危機

- 過酷な取調べ -



誰にも見られる事無く

研究所の内部に潜入できた

数時間前

『この写真を見てくれ』

『何ですかこれは』

『生体兵器だ、奴らは巨人のような生物を人工的に作っている
今回はこの兵器の情報を手に入れてほしい』



『・・・それと、分かっていると思うが

もし捕まったとしても我々の事は口にするな』

『了解』

情報によると生体兵器はここにある
それにしても

「・・・静かすぎる」

ここまで監視カメラはいくつかあったが
建物内に見張りが誰も居ない

ガシヤン



通路の前後はシャツターで閉じられた
逃げ場は無い

「っ！」

(やはりこれは……)



閉じ込められた場所は催眠ガスで満たされ
数秒で女スパイの意識を奪った



「へへっ、まんまと罠にはまったな」

「連絡があつたのはこの女で間違いなさそうだが
ほんとに一人でくるなんて身の程知らずだ」



「さて、色々話を聞かないとな。。。」

「んっ……」

「お目覚めか？」

眩しい

ここはどこだ



「変なマネはするなよ
まずは何が目的か全部話せ」

「……」
「おいおいだんまりは無いだる

まあいい、時間はたっぷりある」



「むぐっ！」
何かを飲まされた



「しゃべりたくなったらいつでも言っているぞ」

十分後

身体が熱い……!!



「どうだ、話す気になったか？」

「……」

「まあそうだよな、これからは楽しい所だ」

「!?」
「みんなすぐにやめて欲しくて自分から許しを請う」

「脳が焼き切れそうになるほどの快感が襲ってくるからな」





♪

♪

♪

♪

♪

♪

♪
♪
♪

♪
♪
♪

♪

♪

♪
♪
♪

♪
♪
♪

「ふーっ……ふーっ……」
「結構粘ったじゃねえか」

「じゃあ続きだ」



「ぐむっ」

「追加の薬だ、これは効くぞ」





ガチャ

「どうだ？何か吐いたか？」

「いや何も、コイツなかなか根性あるぞ
ちよいと多めに薬を使っちゃったから
今日はこのくらいにしとく」



「……つうか、尋問のふりして遊んでただけだろ？」

「へへ、バレたか」


「まったくよー！一応仕事なんだからちゃんとやれよな！

あと今度は俺もまぜる」

男達は部屋を出て行った
薬と悪戯のせいで意識が保てない



だが、何とか殺されずに潜り込む事ができた
後は資料を手にいれて脱出するだけだ



翌日、監禁されている部屋から抜け出し
研究室を探すが目的を果たせず
再び捕まってしまった

「まったく手間とらせやがって」

「絶対に屈しない……」

「まだ元気そうだな、身の程を分からせねえとな」

アイツ



「これから」イツを口にぶちこんでやるからな？
(ひどい匂いだ・・・こんなものを口になんて・・・)



「おえ・・・グプツ・・・んぐ・・・」
(喉奥まで突っ込まれて息ができない)





マチュ

ゴボ

ゴボ
マチュ
ゴボ

「ふいふ、ちゃんと綺麗に舐めとれよ」

舌や喉にこすりつけて精液をぬぐいとってる
これで終わってくれたらいいが、そうはならないようだ

「次は俺だからな！」

「ねーちゃん乳はでけえのに意外と軽いな」

トコイ



「そいつのはデケエから壊れんじゃねえぞ」

スーツごと無理やり貫かれた

「痛くて声もでねえか？力抜けよ」

「……こんなサイズじゃ……全然なんともないわ……」

「必死な顔でよく言うぜ、じゃあ動くからな」



「ひでえな、腹の形変わってんじゃねえか」
「くっ……んぐっ……んっ……」



「必死に声出さねえようにしてるがバレバレだぜ？」

「震えてるけど大丈夫か？」

「ぜんぜん・・・なんとも・・・ない・・・」

「そりゃ1人目だからな、こんなんで疲れてもらっっちゃ困る
ちようど次の奴らも来たみたいだぜ」

はち~~~~~

ドクッ

ほち~~~~~

グハッ

~~~~~

グハッ

ドクッ

~~~~~

グハッ

ドクッ

~~~~~

~~~~~

男達が部屋に入ってくる
まさか、全員と相手させる気じゃ・・・



「あーあーこんなこぼしやがって、舐めて綺麗にしる」
「やっぱ一回じゃ足りねえな」

「しょうがねえだる混んでるんだから、ほら次の奴が来たぜ」

男達は好き勝手な事を言って立ち去り次の男と替わる
その間にも別な男達が部屋に来て順番を待つ
今日はいつまで続くのだろうか・・・



行為が終わったのは数時間後だった
一人終わるとすぐ違う男が入ってくる
結局何十人の男を相手させられた



最期は気を失いかげ人形のように動かなくなっても
男達は無理やり起こし穴に突っ込み容赦なく中に吐き出した

「まだ意識があるのか？ 丈夫だな」
「それにしてもなかなか良い女だ」
「あと五人くらいこんな女が忍び込んでくれりやもつと楽しめるのによお〜」
「ハハハ、ちげえねえ」

疲労で動けない私を残して男達は部屋を出て行った
今日はこれで終わりのようだ
早くこちらにも情報を手に入れて脱出しなければ



数日が過ぎた

朝から晩まで犯されているが

奴らの目的がソレであるうちは命の心配は無い

だが一日中拘束されチャンスも来ない、手詰まりだ

「はあ。。。いくら抱いてもこの身体は飽きないぜ
出すぞ、腰引いて逃げるなよ。。。くうっ」



ダッパ

ズッ

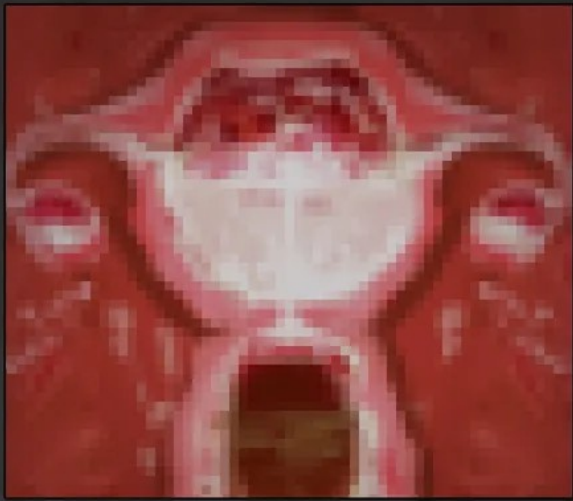
ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

E-38921



E-38921

「。。。は、博士！」

「尋問をやっていると聞いたんだが？」

「すみません！今からやりますんで」

「ははっ冗談だよ、気にする事はないさ

ボスも彼女がどこの誰かなんて気にしていない」

「そ、そうですか。。。ははは」

「ああ、あと彼女の処遇についてだが」



「私が引き取らせてもらう」
「!。。。わ、わかりました」
「すまんな楽しみを奪って、それじゃあ連れて行くぞ」

白衣の男の一言で私はあっさりと開放された

服装と男達の態度から見て重要な役職についている研究員

。。。これはチャンスか？





「あの女助からないな」

「良い女だったのに。。。。」

「あきらめる、どうせまた実験で壊されちまう」

(ここは薄暗い研究室のようだが
生体兵器はここか?)

「君の事は調べた

君の持つてる情報ではなく君の身体の事だ
この仕事の為にだいたい作り変えたようだね」

「ちやうど相手を探してたんだ

そこらへんの女じゃすぐ壊れて使い物にならん」

(この男は何をさせる気だ・・・?)

「君は身体の半分を機械化しているな
残った肉体もかなり強化されている」

「・・・っ!？」

「ああどうやら彼は

君の事を起きて待っていたようだよ。今明かりをつけよう」

身体が動かない

何だこれは・・・何かに掴まれているのか・・・

「オオオオオオオオ！」

「今日から彼女が君のパートナーだ、仲良くするんだよ」

(写真で確認したものより大きい
まさか実験がここまで進んでるとは。。。
早く報告しなくては)

「さっきの話だが、君の身体はすごい

今回みたいな危険な任務なんていつもの事なんだろう？」



「脳や内臓などは生身の部分が多い
そして驚く事にその部分すらも
ある程度は機械でコントロールできるみたいだな」

「。。。」

「例えばほとんどの精子と適合しない卵子を生成するとか
精子を攻撃する成分の体液を子宮内に満たすとか
こうして『妊娠しない身体』にしている」

「そのおかげで連日犯されても孕む事はなかったが
機能としては存在している・・・それなら問題無い」

「。。。話が見えてきた、まずい状況だ」



「彼は戦闘力だけじゃなく繁殖力もすごいんだ
簡単に言うと相手のメスの身体に合わせた精子を作れる
しかも人間の作り出せる体液程度じゃ
殺せない生命力の強い精子だ」

「くっくっく」

「性交できるメス自体いないのが
唯一の問題だったけど・・・
君が居てよかったよ」

「ゲゲッ」

「E-38
キョロ」

「話は終わりだ、はじめていいぞ」



「よし挿ったな
彼女の身体の状態は
マシンで常に見ているから
壊れる手前までなら
好きにしていぞ」







「さすがだな、これだけされても身体へのダメージが少ない」



「そんな顔したってだめだぞ？」

「やめて欲しければさっさと彼の子供を身籠ってくれ」

「10回目終了。。。ふむ、まだ受精していない
というより胎内で未だに拒み続けてるみたいだな」

「思っていたより身体のコントロールが複雑なようだ
君の思考が性行為を受け入れない限り妊娠は難しい
このまま続けられず妊娠はするだろうが時間がかかりすぎる」

「絶対に。。。負けない。。。」

「ふむ、しょうがない」



ドポドポ...

「あぁあぁあぁ」

「力づくでいこう、常人なら危険だが君なら大丈夫だろう」

「電磁パルスで脳が感じる快感を50倍に上げた
そのうえで強制的に絶頂状態を維持させる」

「や、やめ。。。。あつ。。。」

「こんな状態で。。。。犯されたら。。。。」



「おおこれでもまだ耐えるか

だが徐々に制御が効かなくなってきたな？もう一息だ」

(身体が。。。焼けそうだ。。。こんなの耐え。。。られ。。。)



(だめえ・・・快感に・・・押しつぶ・・・されるう・・・あああっ！)



「よしいいぞ！完全にコントロールが外れた！

彼女の卵子が逃げられない今大量の適合精子を子宮に流し込んでやれ！」



・・・すごく静かだ
潜入してどれくらい経ったかわからない

巨人の子を身籠った後も

昼夜関係無く暇があれば男達はこの部屋にきて

何も反応を見せない私を飽きもせず抱いた

でも、今日は珍しく誰もいない



•
•
•

何か音が聞こえる

ドガガガガガッ！

銃声と悲鳴だ



何人かこちらに向かっている

靴音がこの基地で会った者と違うようだ

ドアを蹴破り武装した兵士が入ってきた
その制服は・・・味方だ・・・

「ここに居たぞ！」

「・・・ん」

「まだ生きてる！救出班早くしろ！」



私は依頼を受けた組織に救出された

その後研究所は一時間と経たず壊滅、敵側の生存者は無し

建物も私が見た生体兵器もそれにまつわるデータも

全て燃えてしまった

しかし、最初の目的どおり
『生体兵器の情報を入手する事』はできた
こんな形になるとは思わなかったが
情報は私の中にある
出産の後然るべき処置を施すとの事



これをもって今回の任務は全て完了とする

数ヶ月後
某国地下組織の拷問部屋





「ふう、もう吐いたらどうだ？」

「……」

「まったく物分かりの悪い女だなあ……」

「言うつもりはない」

「そうかよ……へへっ、まさかお前」



「本当はひどい目に会いたくて
わざと捕まってんじやねえだろうな？」

ムクムク



「まあそんな奴いねえわながハハ
さて、優しくするのはここまでだ
さつさと目的を吐け」

これからも危険な場所へ身を投じ続ける
それが私の戦いだから

トキ

トキ



































































































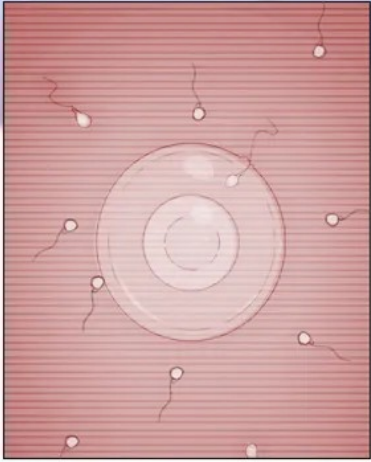












E-389

















